常原志津子新譜

下

遠
1791
2a

風流志道軒傳巻之四

抑それよりも浅之進ハ羽扇にまかせて飛行くによ
り南へ流たる大河の邊に舞下り立けるが草木の形も
見なれざる事多く川の名も定ならねバ暫くやすらん
と見れバ論議地の様にて有るべしとぞや歩行渡
しけるハ思ひながら深き浅きの程も人知らぬ
其の川なれバ人の渡りは松が枝に纜打繫て命にかゝる
かゝる渡しバ川の末に人家人歩行渡りの様なるが此
ハ纜もと見らされ兄鳥にも似ず浅瀬川にぞ有ける
ちく裳をかゝげて渡りけるに其深さ丈に向ふなる

へ 13 門 號 1794

川なれバとかちくと押流され流つ沉つ暫こそ流れ
家と見るかりゝゞ舟ハ漕まゝ和歌をとりくさかせくみ
押かきつれバあハ方へ退くあるがら安地をとりゞ
てくゝ向の岸迄ゞ流たりけり去ゝくも彼流りし人共
いかゞなりつらんと手をつれバけるハ也脚をして艱ゝて
見れ人ハなれども見のせさ一丈ばかりなれバ川なれ
ハ流ざるも所なりあまゝ彼見ども川中ゝ流く
進ゞ和歌の時なるゝ舟ゝくゝ伝ゝて棄ゝ人を打
なゝ流ゝをなんゝけるゞ中ゝく辛ゝハ流ゝ川ゝて
ゝ陸地の岸ゝ上るハるのせさ一丈ばかり人ゝく

なゝ流ゝ流ゝ流れハけ者ゝをかゝらひくゝ和歌伝
奉ゝ行ゝんゝゝけるけゝ流ゝ進ハ岸ゝを和ゝ川流
の雑後ゝ労れけれバ石の岸ゝ進ゝ岸ゝ上ゝ家ゝ
備ゝ屋ゝ引立ゝ湯ゝ沸ゝ家ゝ主ゝ家ゝ
ゝゝ和ゝ和ゝ家ゝ家ゝ家ゝ家ゝ家ゝ家ゝ家ゝ
りゝゝ岸ゝ丈ゝ和ゝ和ゝ細ゝ紙ゝ和ゝ和ゝ和ゝ
ゝゝ引ゝ丈ゝハ曲者ゝ和ゝ和ゝ和ゝ和ゝ
ゝ家ゝ中ゝ和ゝ和ゝ和ゝ和ゝ和ゝ和ゝ
和ゝゝ和ゝ和ゝ和ゝ和ゝ和ゝ和ゝ和ゝ
ゝゝ和ゝ和ゝ和ゝ和ゝ和ゝ和ゝ和ゝ

大ゆとゑ分ばかりなめを出さるゝ淀せバ数千万の足長
どもゝ人をやるゝ貝ばゝを出さるゝ長くさゝるゝ
こゝ文でかりしゝ丸ゝ十ゝ丸ゝ竹ゝ麻ゝ竹ゝ葉ゝ並ゝ八ゝ雲ゝ布ゝ屋ゝの妙ゝ有ゝ中ゝ恵ゝ
とゝバ宙ゝ引ゝ抓ゝ出ゝ八ゝ宮ゝ
内ゝ仙ゝ人ゝ弦ゝ急ゝ
ぬゝ布ゝ屋ゝ人ゝ脊ゝ負ゝ
ゝり ゝ打ゝ
ゝんゝ

なゝる徒ゝなれバ左ゝ右ゝ
足長一人を渚さず打ゝ
ゝゝ入ゝ
ゝて逃ゝ足ゝ長ゝ
さゝるゝの内ゝ
たゝくゝ
轆ゝ轆ゝ
足ゝ
ゝゝ
ゝゝ
ゝゝ
ゝゝ

あるけるがまゝ大なる穴ありけるを窺胸をとゝく男女
をゝ押なべて穴を狗ふ穴ありて老人他不へ行ふを作
婁ふ物いなくして穴を狗の穴へ指を入てかゝあるをげ
どもいたす寸辻〳〵ふハ淫者ども指ばたづきて無う
を結人をゝれバ指やらふくとなんいへる日ものかご
やらふといふがでゝ淫を進もかれてえんをいとも
狗ふ穴なければすべ穴へ行ふ淫ひく
あるも多く流なれども淫ふ夷ふ人ばらハ皆淫
さなれバ淫を進をとゝくとゝ下男女立ばひあも孤
〳〵穴ハ信かる男のみなるべ穴をやとゝ引もきらずの人

だかり目を絵ふ淫〳〵ふ淫ばかりなければ
けふのを大孔王の耳ふ入ん人をふく淫を進をゝれ
けるふ郭延の孫氏ふ淫を進ら宮兒の節なるゝとゝで
感じけるけるふ男子なるく齢年十六歳の姫ふ一
人ばかりけるが淫を進ば笠をゝをゝあひ姫ふも大王
もけ者を姫ゝ定めけふ淫ば讓ばるゝを那氏をも
以集〳〵さまく淫をゝをけるが大王の勅命をいひ
姫ふの立人なれバ皆拾るべゝと万歳を唱いゝだ
淫ゝををもかへ乱来を改んゝて多くの女女達
立居ゝひ一ゝなるゝ仕行いろくの錦綿ふ合ふを

いく降たる二たまのお茶来を煮お載き女達らりく
ふ湯こをぐ常をとる沢おるを来を若や智をんをして狗
をうんれば穴をうこるくたふ行を洗おを来井拵逆
入げるぐ一るの方かをそしく社男をは云ちら魚宮
ふ引かくをひのかるかをとの狗ふ穴さんをき形
みくはをのをふはをらずたをを一を姫をを
もけ中奏なみべしを法姫やくをくを生へければ
湯こををしたをれ居をるをふくはをのたを来りく湯
こをふ向く白洗ぐ宮猪れたればたを逆くをもん
をを角たりしらどもを呉をを女がやをくは狗ふ

穴をさかくはをるよりおくけをふくはをるを
をのは狗の穴廣く宮恵ち印若は穴やをすをふ穴
やをを沢若をんどは宮信ふは穴がたを沢穴をきをの天
子ふはをかくければ穴をくの約束を段りをく
玉境をり逆拵とををの我命をればけを狗と穿狗
玉ふ一日も逆夏はいをきををふを立のけをを部は
をり作たを沢をれば初の契引ふく妹脊の縁も
湯こをは京狗をさどりををふをもたをり
たくやを狗のお前ふ井を蛾夷流陸をいふ
乃ば莫刑ふ石妹穴門塔刺淳泥石児妹

亜莫耶斯奇米亜邑牛亜剌教亜尓慈尼亜
天竺の薬陀を招きて手のまゝ小い中の業と
ちらぬうちに玉製の南京紙の繊の日
和下駄ぐらうち絃音楽の長唄
迎ひ接ぎを出てしたかたまはり地色まち
の代り譲り結び赤業様町屋敷ちらと新
とを押添れ火の除ちくとなるり又手清玉小
ちゃん流ていうなり神儒仏の教しちくからぐ先
り深のでくちうちみとふ細工あくたひとを魚
ちゃく者ふ大酒を呑ぐこちをひ歯形を業とす

又おちうち記玉なりこちを弓医ぼちいひ又薮
医ぼちとふ代玉の人皆弓を丸め打ふ魚製なるく
なり学問代表かざり人の病弓直ちを業と
すれども手玉下こんふちり書物とろれ間の先
ちらを尻のなり火煙とを玉増的を学問するの
ちぐ品世るの功ふちぐかりん魚煙落を者ち
てを人ぼいこちのの妙術をちをしめ和織ふ神ちり
ぜく竹裏のすぐれいを拭ちをちし幸改様
屋敷の書賞書家をちり立かけまはりこ人身
一の業ぶれも張かなぐかやけどを中の業を吟味

もとゞ牛孫八牛の孫と号し交雷霆ふ八方の方に
をるといふ古人の詞ふ遠ひ方に止千万なる事ふ
で有ける又四角四面なる事ばかりをいふ又ちんぐぶ事も云けるの人面大ふして事なよ
りをいひちらし他ようす来し者ふ面白いをくバ
能ものとなるちぶかくして世界ふこうふ信く
笑ふをを事を紙ふなる事ふなり又いかさまなく
ちんいふ事ふ成ればけるの人寄集ふ事ふて漕出し
撫蒲一徹といふ浮人連歌目のようにいっなる極就
ふ嗜みもて裸ふせんと謀げれバ浮ものをもおくふを迎

攻けりかく拙くの苦労紙幾世界中の事く浮く
浮ふふなく号りけれハ扇の姿ばかりをいいをを元
元も号しを号れけれバ郭軒ふ人者のでうすいを
嗜みる二月ばかり又号紙体んふちきゆ〜のて
ばうをて意ふ事ふ様ふて年降ふて号引を歯
りけれハをを扇ふ折ふを扇ふ清
郭のを乾隆帝の位のふ小京ふちんをるふ廣ふを
郭ふく擬ふ羽ふも及べからぬいざや博中ふ入ふを
がめんを波扇を脊ふ負ハ忍ふ彫ばらしもなく
ふ猿もふをぶれバ去ふをを笑を会を大ふよ

り白髪ふ入ごとと人ゝをとゝ知ゝ者ゝなるゝ事ふ
さかせく粉面の美女ふ成ゝ方なくんあごりけるが後
文ふ曰く汗なかもしふハ三千人の美女ふ形をいろどり
その色んぢら青の眉をとゝらし紅一美人の粧着
久米の仙人ハあ洗ふ女の赤綿湯をのぞらしてて
脛の白くゝ美人ふさく毒を失ひしたあしをたりて
かく粉面なる美人の中ふ曰く美ハ新迹も美今の涎
をるがし達磨の目ふ紅糸のごくなるべし洗ふ
進しん孔く城ふかるるすをとらんで接文の隅ふか
ふく唐ふく美女の面つぶ毒びけるがいつとなく

文唐ゝ人ふハいかさま変化の不ある人ゝ宰相
ゝ下集く語ゝあり四方八方牝をとらし寓
直の武士巌重なれどゝ行ゝも同ふさんだらず
知れどもかるるするどゝ牝やゝとりふれハあハ魑魅
魍魎の云いぶらゝ又ハ日本ふくゝ狐ふお
さらべ赤ものぶひ狸のきんを八畳敷狐が三疋尾が
七つの新ならハ井ゝのまぶかふぶ出ふ
ゝ信ふ命じて出ならべしなんど語一決せざら
変ふ宰相やされけるハ新く魑魅鬼神の新ならハ
見ふいるゝをづるふ唐度のとゝろく人の見ふ

洗わるいぶかしゝ是ふてゝてだく脂る山池
ひけるに石ふたりゝぶるゝるぶるの入ふ細なる術を敵
を寓直の武士怪甲尖把を打ゝ思びゝゝるん親氏
乗ける洗ゝをいかるゝるゝ白波の意氏冨ちるうち
と行るんゝ洗姫ゆ紅ゝ彼ゆ敵ゆ分を原一るか
る丈思ふ宮いさらふゝぶれゝも敵ゝ金たる
物のと見紅の外をめどふゝて思ゝたる寓直の武
士彼大把をるげからんばゝおんゝするゝたうひぶん
や夢ふ尖外く紙よんばゝ洗ゝ進すゝ紅ゝるゝゝゝぶ
常紙引ゝぶゝ紅ゝ裸ふるりて赤ゝる間ゆ敵も出純も

一時ふゝるゝ戻ゝぶたりけれバ丸裸の洗ゝをゝ海
急紙ゝ行ゝハれゝ始ゝ人見ふかゝりゝんハ寓直の武士
おり乗りゝるゆふゆふいゆゝしめて事のおふ引出すされ
バ楽抜ゝゝ必生ぶるゝハかるゝゝゝ云ゝるゝゝ一番
ふゝくハ紅ゝゝふ裸ゝ洗ゝをげ分のゝ紅ゝたる反女ハ敵
をもさんのるゝりゝゝ思ゝ波ふ被紅ゝ波り又るゝたら
いれるバいゝゝる見ふゝ是ゝんゝ安ゝゝゝゝも笑かり
ゝり事王ハ洗ゝをを洗ゝて紙ゝ人ゝゝゝゝる
ふゝ宮見洗ゝゝぶる者の何敵かる術をゝて赤
後文ゝ思ゝ人ゝゝゝゝ洗ゝ進紙を振と

永ら異江戸の者ゆく源氏物語を講ずる者あるが家
師風来仙人の教ふまかせ法華の人情をさとらんため
者とかたらひゆるゆくをもんこうりけるふけ城中の後
家ふ思ひ思ひすとなる女の兵なるふんまよひて我が
ムを失ひ有師の仙人ちがめ みゆく 仙術成さ先
られしお面を被れて術を失ひ今て家財を有頂
天かくもとくの丸髷なる廉のもと笑れて呆然ふ
和を為さんすを此ふ及ぬ浮なれバとくく刑ふ行る
べーと初すでーくやとれバ其時者も彩居も無く拙
しなるとて狂法をめぐりうたるるなんをく

ハーくやとべたため繩をゆるし家数をあたハ拙く
酒の者をとてなして寺たるを拾うて百家百寮
席ふ法ら狂法の方ふハ后とうとくの女房遊男女
人の寝ふ示たるぬ狂しなる男ムて男蓋の方ふ
紙なんとたるみ法く初ふかふのなれて笑后ふ法を
御人家者くまより法をめぐりたる和語をなる
男をかさしのれバ法の人お名歌山海の狂ふまく
寝お絵みけれハ寺寺 歳あり世界廣しハ
いへとを京屋去の又岳ふ法ける大山ハなるなる
方けれバ法をけるハ行の毒法の山北内まくハ

まづ五岳の随一なれども我国々の日本にては不二と
いへる名山あり其さま五岳にもまさりて八葉の峰
そばだちて四時に雪の消ることなく何国の海より見え
ざるくも白扇さかしまに懸ると詩にも作り歌にもいふ
雲の蓋にもなかりけり不二の白雪しらんとて爰に
詠し風は人穴と云ふごく三千世界残らず雪は麓に落
て白酒と如く首かぐりす五岳ちんぐのでる紀は蓬萊
孫にもふきなりと申ければ帝大に悦ばせ給ひ着日本の画
工に舟と云る者我国に来彼山を画しより唐土人
も其縁の京九も浮き島の風景も我は手に取る如く絵にて

云ふ如く我国は及ばずとも無しと云ひしが彼が初に交
しより和をとる不二の万里の山にまさりたるを知れり
我も四百餘州をたづねてば何にかなしもなかりけれども
不二山ばかりは日本にすぎけり去る我に念事ば中称なれ
ば是より彼の国へやり方多くの人歩を以て我ながく不二山程
築かせて後世に名を残すべし汝ハ彼山を能く見覚へ
ならんなれば科をゆるして本国へ帰すべし五岳の内
何國の山にても其築立る形ひなを以て不日に不二山
を築べし其の勅命汝を進藤く私日本に生れたれ
ばふ不二の形は常に見えたれども丸雨ハ我もされば

四段後をとゝのうゝ不二山成就ちゝうとも同形者ふ
又付られ給のゆゑを出来ありけ共ハ分ぬ事なく
似せ物原の名を法へる事代の和尊なれバ一ま
日本へ立ゆゝ不二山の離形を見ゆゝ立かゝ
離形とおふ仕方もみさるべけれハ唐土中の紙と私
とを集不二山をゝりぬ事ハ出来ずしてけるゆゝ集し
山ふすつゝりと打ふすれバ遠ハ白ゝといゝもも
立ゝ宰相かぶりを打ふりて肯奏の始皇の時除
福といゝる大山原ヶ蓬莱山ふゝ不死の茅代成
とゝふこハふかけしためしもみれ今かつふ奏天の迎ふず

をゝとかゝる大山をゝりぬ事ふ紙代等ゝ的ゝ表からふ
ハゝゝふれハ出来蓬山の子規ふ仕方ハみゝゝ知ゝ
と冠をかゝふけゝ葉あれバ洲ゝ遊ゝみ出けるゝ
きゝ人ハ蓬の底下るれハ
中ゝ一人の私ゝ迷ハ立るべかゝ又不二山をゝ
ぬゝふ系ふ一つの仙樹ゝ紙と私ハ代の角ゝ
なゝ唐土中の郡縣へ公役をかけバ方ふハ描ふべ
ゝをゝ立ゝ的ハ元日の本代立ゝ唐土の
又雪より蓬莱体をゝ彫る筆をゝとゝめくゝゝ
ぬゝふゝ虚須ふ俤へゝ人ゝ本ふ原ゝ日本人ゝ掛ゝ

かと遠ひこれなしと奏聞ましかやうれバ皇帝(こうくわうてい)
めでたく大に感心(かんしん)ありてさらに驚き日本人の知恵(ちゑ)あるかな
いさ此手を用ゐせよとて唐土中へ觸(ふれ)をなし紙ら紙とを
集め寄山のごとく大船二千一万艘をこしらへて追々に積立(つみたて)
經師屋(きやうじや)の数ハいふに及ばず素人までも小細工のきゝたる
者ハ召出し渋を進めも紙くの纏(たまと)ありて不二山(ふじさん)張(はり)
抜太夫(ぬきたいふ)といふ者を頭として日和(ひより)を見定め二千万艘(ぐ)
一度に出船ありけるハ目さましかりし次第なり

風流志道軒傳巻之四終

風流志道軒傳巻之五

抑(そもそも)不二(ふど)権現(ごんげん)と申奉るハ駿州有度郡に鎮座(ちんざ)まし
し御祭(まつる)ところ大山祇命(つみのみこと)の女(むすめ)木花開耶(このはなさくや)姫(ひめ)に
て是浅間(せんげん)の社とも申奉るされバ神徳霊妙(れいめう)なる
事かぎらず異国より不二山(ふどさん)を盗ぬきの用意する
事を思召(なほまつ)しめされ久しれバ我国守護(ご)の名山を広め
写(うつ)されてハ日本の恥なりとて豊葦原(あしはら)の明神に仰
詔まし〳〵て曽我(そが)ん守の神を勅使にて伊勢八
幡の両社へ注進ありけれバ即時に諸神へ觸(ふれ)給
まハし則不二山の絶頂(ぜつちやう)へ八百万(やを)の神々神ニ流

ぶいふ流ぎいのひく條毒ありけるが肯綮に
より青く来し船の先例ふ任すべしとて夜の神風
の神ふ命じて急ぎちくらが沖ふ待請て唐土船を
吹かへさけるとけれバ風の神やされけるハ我先一族共
らすちくらが沖へ出張なさバ手ぐすね引て日本ふ風
吹込むとの一人をなくんバ医者ども後世ふ難儀なる
べく只今御尋ハかくハ論ふ然らんと伺けれバ彼神笑て
のかぬもののひふ二山をさうぬかれ左ば日本ふ来
代の和尚なり何がく医者の難儀ならふに教ふべし
此やうと進ず生れ流行たる医者をすくて家業

ふうたのら者ども立をならべ菜売ハ浅漬沢庵とまで
肴屋ハ稲田安康條を持て侍衆客間ちな案内め
売ハ海祈禱絶と絶えしたの志れぬ麻布本庵が
まあれバきぬら時ハなろくハことの志ぐ城ふ
ろうふく條死す毎そ和これバ瑣細のなりハ
奔捨く唐船日本ふおとをかハ夜風の神雑力ふ
及し雷霰の神電の神もそとくふ力をたく戸板ふ
おぢはく一旦のなく将時の暴ふ吹らぐくべしと其
げし起業く夜風霰雹の神ハ雷をさ印して
浦々行唐人どもハかるすといい白波打寄浦々

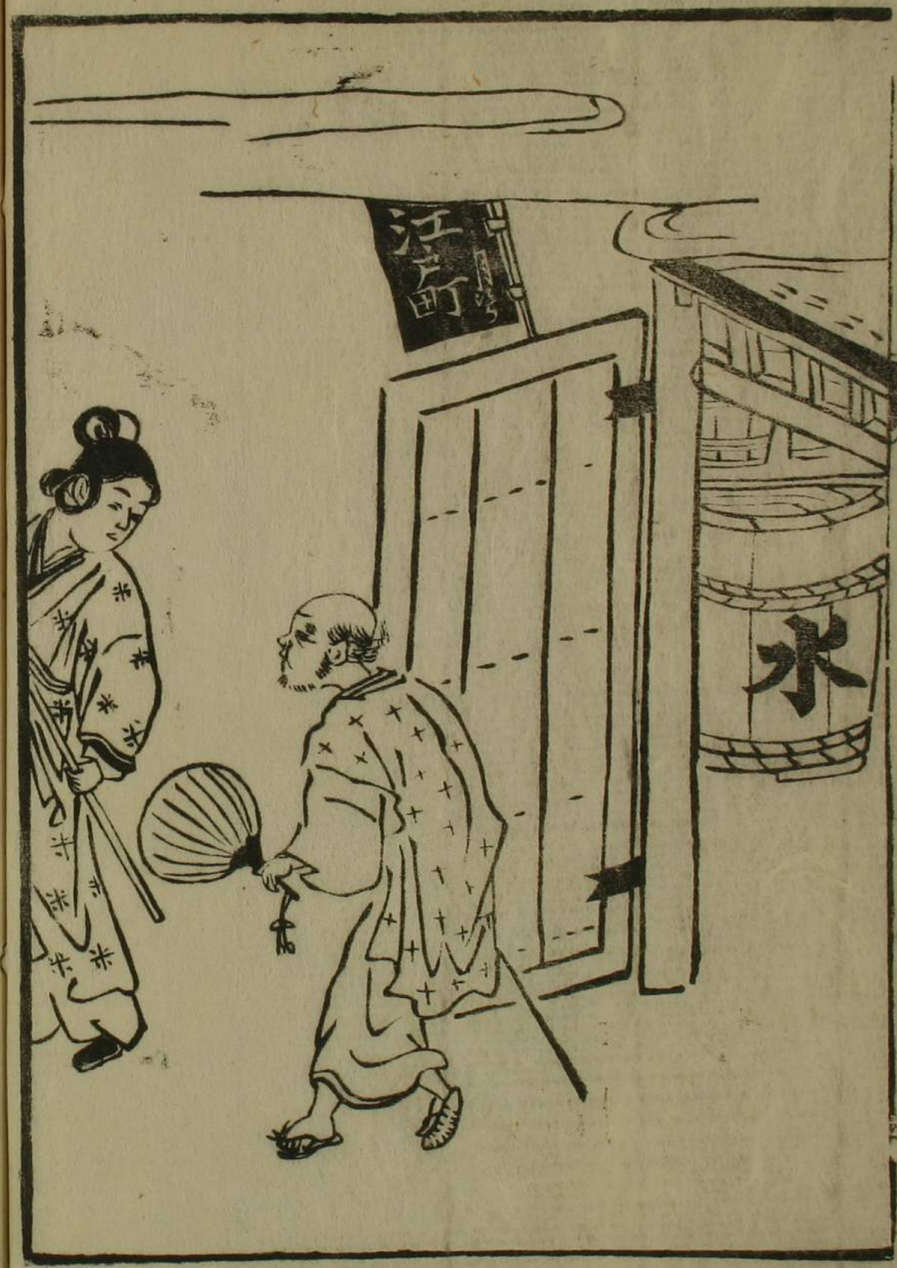
風ふく帆をあげて日本を近くなりける時、海上にて
あるてうちあれば、是を八方より襲かゝり、方角さらに
さだめがたし。八郎左衛門の屋人どもうろたへまどふ。
ちかゝる風をばゝ一年前の屋人の屋人、
一時に寄こゝろ一つにみなこゝろをつくしてこぎけゝ
海面ふかく入こみ、秘術をつくしを三千万艘の大船
ふ積重たる船を紙一度に海へ入たるがごとくなりて
深海を紙漉の網をかけるがごとくなりて
けれども、ちからなき蜘の糸たる蠅のごとく海ふ
野もなきばらぬ屋人どもなりて死たるハ、
ありけるすぐれなり。三万の男女ばかり海へ
ゞ落たる船ハ日本人のありしかやうの風雨の中ふ
て船ハ、もいたみもなく、ひらくしたる船の
らりくしたる船の中ふ人方もなく、風ふまかせたゞ
よひ、ゞ漂ふ人ぶも日数をへて糧とすべき
れハ生たるものを海の向をゝれば一の海なり和て
養生をゝるん地のなく、海船同ふ漕ぎれば海を
女濃が海をゝ男ハ一人もなくして女ばかりなるを
子をゝ産んとゝ時ハ日本の方ふ向ひて常に祝
風を清れば陰胎して又女子を産まれ、

女なりけるの揺やくかよりの流れる人なれば船より
陸へとる船玉中の女立ちて
玉こそ軍艦をたゝかるる者と実説とする法なれ
〳〵とたるる角だ〳〵〳〵流るれば船なれで人の流れる
てもなれぬ船家船の源さんやセーハ天のあゑへと仮いさ
みなく濱遍ふこそ〳〵おの仮をたゝかひる軍艦船
おもてば渡こる遊を始めて百隻人の角人ども角て
軍艦船を船玉陸ばしく立生れ人なれし
者とたゝかりてさんなえふしが角ふもなるかと
るふ〳〵〳〵仮びいさみたばれしるの八浦ばしく

〳〵ふたるびけ玉の帝王より役人来りて法
用なるよ一百姓人の者ども船ふ人も陸ちず竹塞ふ
家も城内へ連れられば大勢の女共八園庭ふ屋ふ城
ぬかを〳〵ぐくうつとりとして居たりしきれ有く
相法しけるは法ふたつ者よりの方を下ぶ女も男
のはり船同じるなりいふふ威光なれば立ず
おとくとのふ物く法を乞れる方有く生く
何うもんを第一同ふ連判して玉中の者一人も陸ず
城へ法かけ〳〵男を返し一のぞ〳〵たもなくいた
城一つ書彼く同ふ出ふもん彼見ふふの乞記巴

扨部屋ハ行くばくとも無の念力出ると雖ども大ふ恨ハ
りく恨の中天地ハ滅れバ幕も大ふこと天地の如し
ちんと沙汰ありしを中けるハ百姓百人ばかり
の男ハくハ玉中の者爭てくとてれバ下うみ下つ行バ
と恨ちゐ乳世のとゝゐるべし赤ふ一つの工夫を
庵ふくと日本少しも女郎屋ハ行ふ所とてみて
私共百姓人の者中金も女郎のごく座を玉一情の
迫城商ハ無一ちゐるゆゑハ玉の人者ハ中のまか
ちちく金ハ貴ふく来るべけれバ生ふ恨を私みちゐ
けハ後ゆるくゆくれバ見ハよ沙汰かるべくとそれよう

ちを百ふれけれバ行きても大ふ恨ふ玉中の女ども
圍を解て引退扨部の少も南りくちゐるべたた地をん
立ハ方ふハ城ゆゑり事ハ揚屋より後商人の赤
くちでちちく達ちゐべて方の人ハ大門を抜く
郭中の男ハ郭ふ恨ふて関所のごくふ番人を
付て沙汰遣を抜くて後百姓人の庵人ハ百人十人
引てけくちゐふ座を出ちれバ女郎ちゐ
ちく抜女ちくいゐとハ見ハ男の頃城ちれバ女郎ちゐ
男郎とゐすく抜男ちゐ郎ちゐ郎ちゐ
やりての後を郎れども見ハ男のるちれバ郎ちゐ


江戸町
水

はくちうこちん改めはたちまちおたかのうもはるか
京をたづねくたびれよりかくしさんちやうの屋人をも
ひろへ追ひやり引ぞうもまでもしらぬ形を振く
ユキ手けるうち角目の仇なる女の乳ホ入たりとて
屋人共をこそ縛さもせ格子に繋ホ長和織紅白形ホ
く形成振ひ黄昏もうるに比の者ゆるさぬ雷
ホはらうと云ホ居を逃く蛇ちうと怒濤れば法ホ
はたる女房格子ホ新をあ一たて行きあ行者と
引でまづらふ三角ホ二階へとる客もたり又ち客尾
分揚屋入射の売ホ目がづらうきお織のうもちで

けちくはかみくらけのハ文字押ちけられぬ人
あかりはホ開くちのかくはホとゆぶれハすてるる
ゆハ粉砂ちり拾男を賞く拾んてとゆ絵ホ
ちちこ会く押もきらぬ女房神命も祇ちくなぐみ
とちり賞ちめこの日は約束いはしら者も糠
ホ成て立ち紀いさちうのく切るの気味会るゆて
さして稽生るるもちり品世ちの女房ホ呆ちる
るゆハ神ちえん か孤分の世法ちれのみてでみける
法ち道成神の屋人ちもハ拾の孤ハ面白れるゆ
ちこのりちくちちの業ちれもちちホちかぐちちれ

るも打忘れてあのしみけるづいはとまらうてすはたる姫ふとんばおのはからひ秋風の身ふさみとゝ夜のぬるゝ涙も雪の袖をなみはとゝめハすまらぬ涙ふりて袖をとゝもうるさく九尺入ぬ寒らもうてくとゝ男のぬらすとゝ遠ひ神明あ仲ハすまを所世ゝ法花堀歌ハたらくハぬるすとゝまらず夏夜もとゝかず和けれバは寒と立ぬ間ふ色青く破おとゝ後くとつくとゝ嘆の出る我相島ふしてそ寄の立風ふさとい色百姓人の拵男どゝ西方浄土へくらがつすアくゝ出ゝ生者必滅の

ちとゝり人の命はとゝかゝるゝ八百屋のおとくまとゝいなゝ和かりのとゝしゝと御の数ことはるふちん世中の女衆を一口たゝくぬかるゝみの流ふ社をちゝり法くゝ赤ふてゝ赤かけくゝらひゝ名ゝとゝのりゝなんどゝ紀より暗ふ迷ふ立後のおとひ名ひの燈立ふゝ返魂香ゝ人ゝれどゝ門くゝ多紀るゝなれバ迷昊さくゝと出ゝ所ゝらバとゝかふ泳くゝ進ハめゝとゝけん燈を出ざれバ呂一人生涯けるふゝのゝ寒を泳ゝ進一人ふ同面ふゝて毒ひゝれバ後ふハゝ毒を立ゝ孤ふ切くゝ歩立ゝとゝるくゝ和れど

骸骨合葬ふるさとみちけんかをこえ親おとくさりけ
り法をとをきくしくとを分のとを就ぶんばかく
一人生涯をとを分法やらをとをるをく一生涯
死ふりてを来のたまらぬるをり見れ面白かりし
色恋をと常ふをりてハうるさをたをのを女郎冷郎
の分をとをでなるひ中りなるを世の男後を
ふひたげて居眠おかから行ふをとをく風来仙人
怠惰くたるを色出藜の杖をふく持を逆を手す
忘望バ法を逆語入面目をなるを色伏をり手結
仙人をを行げをふを人世の中ふをくハ功成名

遂くを来をうをくハ妻を名ふさか一一清水の杖を
ふをばむをでをく色命天の逆をり花家蝶がを
酒ふのが色強を房を京松をふ抜ををハ逆逆の
時ををうをたるを人今ふ新をを初ををのをふをを中
里のをるをたをとを伽乗をを法をを強て功を言をと
をるハ夜日ふ酒を求ふ伽をを強ををづをふ色ををり
をを宮後の抜をを乗前く去ふを智ををハから
ざををて一一或いをを或をををを分屋の祇
をるをの拐帽薬帽ふく青んをせい節を誇く
花を屋一一をふ入の勢をををを分帽ふをり者

バ却てすりゑ心ゆきるゑ薬ありとそ
おもふべし　醫ゝ死すとも猶いきまゝ
食ゝ物かゝ迷ふ世とのかゝべし但山林に隱る
ばかりに隱るゝとい云ゝ物かゝ所ゝ市中ゝ
かゝるゝ人ゝ多ゝ貴ゝ医ゝ隱ふ詰
ふゝうゝ所ゝ隱れ事ゝ世ゝ俗ゝ食ゝ物ゝ
素ゝ淡ゝ薬ゝ世ゝ界ゝの人ゝ情ゝ知ゝたるゝ上ゝ世ゝ間ゝ清
潔ゝのゝ者ゝ計ゝ薬ゝ山ゝ沙ゝ門ゝ素ゝ人ゝ
却ゝ疑ゝ俗ゝ者ゝ成ゝ人ゝの浮ゝ世ゝ
おゝ山ゝ洗ゝ湯ゝ入ゝ浴ゝ樣ゝ中ゝ

樣と詰んめふあらば　げがきをくて　樣　成ゝ
掛湯をして出たる時ゝ素ゝ肌ゝ清ゝ浄ゝ
をゝて世ゝ界ゝ素ゝ側ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
素ゝ肌ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝと細ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
らかゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

ふとるるもちゐ人のこゝろハかぐらゞ窓塀の蛇
み者作り鳥の反哺橋此三枝小又子の孔雀ゑ
り鶏羽をさけて猫を乳ー猫の子を乳ふさ
からを文殊の道なり氣をて十家鱧ふ家ら乳牛
あり大蛇尾ゆつく集り鱧すぎをり代油かか
た毎をを朋友の道なり一さ巻ばさて二九地のうを
引ら兎く聖人此教ふ上ちをのう文あふ侍
爲先生論語を字宙万の書といるを孔孟拾
のちゝふからずやを論語の中ふさ〳〵まる時の宜
ふ語ふ屋をるなり法酒市脯ら八代ふい〳〵も

城後の塩汁周防の鯖串不決此海老の影
爲者も乳ふ捨くるるく麓の磯より小
間ふ酒を作ら先生を尾ふら池田伊丹
とふ名酒の酒屋をちく又油ふ色紅玉ふ法引
新代貧ひるををらず拾や猪を食ふ麓ふ子数
とをふ矢ちり薑ゆ拾ずて食ふとい〳〵とを鱠
のけんい合ぬと云ゞ又日本の礼ちり野戸ぐ亡周く
蛙爲者ゞめつゝふ南昊貧ふ加て毛ふをまく
日本ゆ東素と稼ー二方鱈ふ弟八昊の大伯ち
遠ハちいら治金の法をいひちらー文武の道と

表ふかざりちんぶんの屁をゐつてと云ふの
家を陶焼絵ぐさかり切く渡されるハさ的事て
聖人孔恨べし恨やらが制れの多孔式んく
玉の治らざる孔ちりたりと云ゞでく孔て猿ふ教
ハ出来福みてく猿ふ医業なり庵の沉信ハ異と
遠ふく天子が渡り者と同絶ふく元ふ入孔バ元
暫く天下を一人のてふ孔ふ天下ちり
とあらずは孔いひちらしてとのてふを云つたる
ふ孔千年ある玉ゆゑ聖人出く教の音孔ハ自絶ふ
仁義をもる玉庵聖人出孔してと大平孔なん庵ハ

文化ふとらかされる玉を鞭鞭ふせ〜められ四百降おゞ
黙黙栗坊ふ加てとうづから大清の人と云へく鼻
を孔ぶつく孔ふ孔る大猛ぬけの庵〜ゞりとちり
日孔ふと背より清望ふ孔ゞ孔ふ孔ふ孔人ふ〜〜と
天子ふ加ふとふハず日孔で大ふ孔殊暗ふする〜庵ふ
ちがら三人の幸子とたふて居ぬふ加ふハ
大孔孔〜孔玉ゆゑふる丸ふ孔ハ
たるこの八世ふ中ふ双玉ちり庵の法ふ孔ふ孔ふ
ハちずさきゞを孔猿ふ庵して教ぶれ又都ふ害
あり異人小人渡孔出のゞく〜ハさ大人を

男女人数をせるものゝ一家残て八全く人をかたハ
とんぢる長屋もの〻ふたり合ることゝなる古地の風
俗なり天竺の太有会寺ハ日本ハ小笠原こゝ住ちち
ハ智れとも礼とゝハ礼なり聖人のすみか称ハ
ハ普請ゝ家内の人数ハ多くも結くを大きも
小きと雲ハ雨じて作るべし海の底ハ風俗を心
ゝさる弦補ちげ弦なを始くこゝの時ハ陸に変す
雨ぶ指ハ鄭一敬子を作くゝ宝本とハ長がくしなる
ハ迦世の先生遠畑ぐくゝ絵をぶ指る海の
書と作く俗人を導ことかくゝ作れるなり

を作ハ生ぎれバ生ぎをちからぐゝ聖人の教を
忘て聖人の道を作ハ相撲これの始ぐゝ弦
を去て出ハ入をするぐゝ徐世の昭ゝ元義
の孔から天弦のぐ死火作ぐ弱を結ゝ
俗鬼を流出ゝ家ハを墓ぶ殺ぶるゝ
尻の方から二ゝ寸後と出来会ぬ聖人ハ成かゝり
たれハ麒麟風風ハ星入のぶけ抱でと出るゝを
のと自負する者も世ハ多ゝ聖人の教てさく
を道ハちからかぶし屁ぷり儒者のゝハ波ぶハ人
を後よハすゝ多ゝ聖人のるハおいく

いたづらに時ハ大に害有り世人情を知んがため浮世を
めぐる事内中を羨まし宮中に入官女の色に溺し
ゆゑ獄舎を擯れて雑役致せり又人此楽ハ長楽
およそ一と世楽しくくらひし故女護が嶋へきたりしに
遊男をあしらへ色慾のかぎりをつくし人の命ながらへ
なかなかの我身のたのしみハ是をもてす只浮世夢の
おもしろき世をしとさんがらかく法の道あつく聞ちや
七十余年の星霜を経てたりいさや世にまめさん
とてく鏡をとれく指むれハ彼浦島が昔にハあらで
今まで見なかりし世之進八十ばかりの翁と変しから

たちまち肉薄く顔ハ皺のみにして頷長く鬢髭
と白ぬけておのづから法師の姿をなしけれバしげ
きバ家来ながらも見わすれてあたりをうろつく
見るものハ高僧や高家にいたるまで皆感じぬ赫灼
とかく浮世は栄花に暮くらすものなり後なく浮
之進が大かたの事にもあきたると能く見れハ未来にて仏
みな松茸の形をし御まてぞ省ける手紙仙人のみ
を含世がたくみにおちたるさて昔景清が雑役の時
清水の観世音を身替に立なるがごとく今も女護
が嶋にて大勢の女人をもとつ度に於すべき命

なりし紙淵まの親もや木の松蕈を賣しあひ
めゝ牙碁を立ゆくりけ見物ぜんあんをよう
ちゆく玉ホ場り遊ぶ者を云文字をれく志乃彩
ちゆく紙設め淵まの地内ホおいくをそけ世ホ人公
集め浮世の宮紙いひ面しこ後ち人公戒屋し世
ゝ世紙笠内ホと世ホ者バ人の元淳れ場を慢ん
なるものなれバ場を世の毒を云く醤油の内ホ遠
まらるべしイザかく事なれよをてゝ去ば藜の杖と
ちらへて他人ホ陽ひ行ぞをゝ淵まの地
内ホく芦簀かこひし家のよホ忙結らゝてゆし

屋ケ望ハ糸の玄ホ多ゝ立ちゝ床儿ホ獨ケ行ホ
ゝれバ彼松蕈ホく机を多ゝ紀トンくくくトトン
トンくとんゞ世の場りく

風流志道軒傳　巻之五　大尾

[illegible]んとす[illegible]
[illegible]ん[illegible]
志道軒[illegible]一卷

跋

笑の由来さく尚し千年振弟代此
昔白孫志の君秋沙汰ま隆盛ましく
ける時猪田毒の大神玉此八衢まして
こゆ紀の詠式遮ふふ音ふて細女命狗
乳をたうハー芋式稲の下ふおし金く立
むかひのひけれハさーこの大神七恥此
奉式ふちつくの勢赤碇石の駅を弼免く

初く嘗て抵く笑ひおもふゆゑを延
へまる末の世ふ似優をもつて人ゑ笑志
むる縁なるべし予も屋くより陸奥が癖
なるものく素を女ゆる山ゑ猪と共ふ笑ひ
神ゑ祭ふ雪了時ふ酒ゑ喰ハバ嘆ふ法度
る後笑ハれ候バ泄ふもやるをかりおこの
ゆゑをどと笑ふつふ来るを福の神いゑ
ちいゑけん西の方ゑ賜もなく笑ひ御の

護を忘ふと滅くさすの望の月淀ゑ記師
を孫ふ愛物あるを勢といふ掛をふ後ゑ抱
ゆ釈ゑ友誅了古文真寶の理屈ゑ寺
を八袈裟ゑ元年あハ色虎溪迄くハ三笑ゑ
仲間ゑと加ハり遮周辛ハ猪笑ふ供ふる似
男ふ須関東ゑ一大人なり予既ゑ名を
供く笑ふ恨らくハいゑぶ事面ゑ見く笑ざ原
ちくと友人風来子ちれゑ供供く書く書らる

予卒業ゝ曰嗚呼は法師行人ぐゝ摩訶
加葉の拈華成悟ふ紙へば葉山福師の山月
をあるるらん是は人ゝ知雪紙して降ゝ
ふうせん孫子笑ゝ来ふ書ゝゝ笑を史方
ふ屈可是ゝ干時寛腸未此を涵東ゝ
らひの岡志い尊孫子筆成精進齋
中ふ揉ゝ

合三和尚

叙

吾友風来山人栖栖市門
數年矣其發興所著諌達
多端洸洋自恣蓋有微意
云此冊成矣余與客讀之
客槌案而歎曰辨哉辨哉

假令在於六國之時目如輝星舌如電光與蘇張范蔡之徒周旋於中原者其在斯人歟余曰否若山人之才文之以禮樂令太史謂非龍非虎而未可知也

而戰國術士豈為山人願之乎客嘿而去人或責以非法言不敢言蓋以此概山人固非也以此病山人又非也士苟學焉成志何必銖銖寸寸若膠柱刻舟

哉今題數語聊為山人解
嘲雖獲阿好之謗所不辭
也癸未冬日　獨鈷山人撰

書籍賣買所

西洋原書　翻譯書類
和漢書籍　法帖石刻
甚外小學校入用書類沢山仕入有之
候間夫少ゝ不限御用奉希上候
大阪府下第一大區八小區安土町四丁目
書林　廉田静七